

認知症患者さんに対する

# 口腔ケアの

# 注意点



鎌倉市歯科医師会

遠藤 勝弘

一般的に高齢になると唾液の分泌が減少し、手の器用さが低下するため口腔を清潔に保つことが難しくなる傾向があります。なかでも認知症がより進行してくると、自分で歯みがきができなくなり、その結果口腔内に微生物が繁殖して、口腔や全身の健康に影響してきます。

口腔内を清潔に保持できれば、唾液分泌を方進し、口腔の自浄作用を促進するので、認知症のある患者さんの全身状態の改善にもつながると思われまます。しかし認知症が進行しているとき、口腔ケアや歯磨きの意味が理解できなくなる場合があるため、歯ブラシを口の中に入れてよつとすると抵抗することがあります。そういう時は、いきなり歯ブラシを入れよつとせず、少しずつ慣れてもらうことが大切です。

では実際に、自分では歯ブラシを使えない認知症の患者さんに歯ブラシを口の中に入れて口腔ケアを行う場面を想定してみましょう。

## 1 歯ブラシを受け入れてくれる

一見何事もなく歯ブラシを受け入れているように見えても、大きな不安感を持ち「何かされる」と感じて怯えているかもしれません。歯ブラシという痛そうな棒状のものを口の中に入れてられ、無理やり口の中をこねくり回されるといって、いやな行為と感じていることもあるようです。我慢できる患者さんは必死に耐えている場合が多いのです。ですから、できるだけ痛みを感じないように、そして我慢の限界を超えないうちに一度手を止め

て、頑張ったことを褒めて口の中がきれいになったことを伝えてあげましょう。

## 2 歯ブラシを口に投入すると暴れる

我慢できない患者さんは、手をあげたり、唾を吐きかけたり、足を蹴ったりします。大きな声を出して拒否することもあるので次のことを心がけましょう。

- I. できるだけ理解できるように簡単な言葉で話しかける。
- II. 口腔全体がきれいになっていなくても、最初のうちは短時間で済む違和感の少ない前歯部のみを清掃して終了する。
- III. 口腔ケアを行う場所を変える。
- IV. 歯みがきをする人を変える。
- V. 刺激の少ない器具を選択する。(スポンジブ

ラシなど) 工夫してケアを繰り返すことで、徐々に清掃できる範囲が広がることもあります。根気よく続けることが大切だと思います。

## 3 歯ブラシを拒否する

拒否が強く、指示にまったく従うことができないような場合は、患者さん、歯みがきをする人がともに安全に口腔ケアが行えるような手技を学ぶ必要があります。自己流でやるうとせず、専門医に相談してください。

認知症のある患者さんが常を感じている不安を増長しないためには、どのような声かけや態度を取るべきなのかを考えてあげてください。患者さんの表情やしぐさで判断しながら、患者さんが理解できる言葉を探りつつ話しかけましょう。しかし場合によっては、「歯みがきをしますよ」と声かけをされると、以前に口の中を触られた不快な体験を思い出してしまうため、あえて声かけをしないでそつと優しく口の周囲をケアするといった判断が求められる場合もあります。(遠藤歯科医院)

参考文献：基礎から学ぶ口腔ケア  
監修 菊台 昌